

時空間の旅人

(和紀 絢子 編)



ここは、政府特別機関歴史管理室である。

和紀絢子は事務員として採用されていた。

若い絢子は学生時代、スポーツが好きで色々経験をしていた。

ただ、なんでも興味を持つ性格なので長続きせず、次々と手を出した。

だから、球技から武道まで一通りやってきた。

性格は至って明るいし、男っぽい。

同じ職場の男性とも気兼ねなくお喋りする。

インテリで線の細い男性職員達を昼休みに引きずり出し、バレーボールをしたり卓球したり...

最近では、男性職員の方が昼休みになると、こそこそと逃げ出す始末。

職業難で偶々受けたこの管理室だけが絢子を採用したのである。

体育系の絢子自身、なんで合格したか疑問に思っていた。

絢子「健一君～～お昼休みにバレーボールしない？」

田所健一はインテリで東大物理学科出だ、痩せこけていて一寸イケメン... 絢子の気になる男性の一人...

健一「いや...遠慮するよ...この仕事...片づけたいんだ～」

絢子「そう？つままないの～～～じゃ、ランニングしてくる～」といって、飛び出していった。

そんな絢子を健一は羨望の目で見送るのである。

その頃、歴史管理室長の部屋の電話が鳴った。

総理直通のホットラインである。

矢田部清二室長「はい、矢田部です。」

聞き入る矢田部の顔から、血の気が引いていく。

矢田部「はあ...どうしろと...」

『.....』

矢田部「しかし...まだ出来ておりませんが...」

『.....』

矢田部「はい、何とか早急に...申し訳ございません...」

矢田部は、田所健一を呼んだ。

矢田部「田所...まだ出来ないか？」

健一「はあ...もうすぐなんです...実験もしていませんし...」

矢田部「そんな悠長なことは言っていられなくなった...」

健一「えっ！まさか...」

矢田部「そのまさかだよ！敵に先を越された...」

健一「...」

矢田部「シールドは破られていない...日本に変化は見受けられないから...」

健一「ですよね～～私たち...生きていますから...」

矢田部「ああ...そうだ...しかし安心はしてられない...モンゴルのある町が消失したそうだ...」

健一「えっチンギス・カンが？」

矢田部「馬鹿な！チンギス・カンに何かあったら...モンゴルが消える...」

一汗かいてシャワーを浴びてきた絢子。
事務室を見渡せば、若い男たちはパソコンに向かって事務に余念がない。
何時頃からだろう...男たちはひ弱になっていた。

2100年、世界は随分と進歩し重労働の職場は影をひそめた。
すべて機械が代行してくれる。
それに伴い、男たちは仕事に在りつくため勉強ばかりしている。
進んでスポーツをしようということがない。
スポーツをしている時間があつたら勉強するという風習になっていた。
だから、自然と一部の女たちだけが体を動かしている。
健康で丈夫な子供を産むためにと教えられて...絢子はそれに抵抗を感じていた。
絢子の場合、そんなことではなく、根っから体を動かすのが大好きなのだ。汗をかいた後の爽快感に魅力を感じている。
仕事をしている男たちは、決まって痩せている者が多い。
だが、痩せた男たちだけではない、反対に肥満も蔓延している。
これは危機的状況と絢子は思っているくらいだ。
昼休みスポーツに誘うのも、いづらか改善してもらいたいと考えての事。

シャワーを浴びスッキリした絢子が事務室を観察すると...何かザワついている。
見回すと...健一の姿が見えない...隣の席にいる男の同僚に尋ねた。
絢子「田所さんは？」
同僚はコロンの香りのする絢子をヤブ睨みしながら「研究室！」とそっけない...
絢子「ふうう～ん...」
内容を尋ねても、難しくてわからないから諦めた。

退庁が近づいた頃、絢子に呼び出しがかかった。
地下3階の第一研究室に至急来るとの指示である。
絢子は心の中で『まいったなあ～～スポーツジムを予約してあるのに...』
地下3階でエレベーターを降りると...いきなり警備員数名から身分証明書の掲示を求められた。
重ねて行き先の確認だ。
絢子「第一研究室に呼ばれてきました。」と正直に答えると、警備員は電話で連絡を取っている。
警備員「失礼しました！...どうぞ～っ」
絢子『随分嚴重な事...』

第一研究室に入ると、田所健一と入社式の時、訓辞を垂れた矢田部清二室長の2名が待っていた。

絢子「和紀絢子、まいりました！」

矢田部「うん、よし！」

矢田部「今日から、君もここの一員だ。勿論、勝手に外に出てもいけない！しばらく帰れないと思ってくれ！」

絢子「え~~~~っ、こ・今夜...スポーツジムを予約してあるんですけど~~」

矢田部「キャンセルしろ！」

絢子「そ・そんな~~っ」

矢田部「いいか？この研究室は極秘情報を扱っている。勝手は許さん！！」

絢子「辞退します！！」と言い残し踵を返す。

矢田部「なに~~っ」

しかし、出入り口には武器を構えて警備員が立っていた。

絢子は、警備員に押し戻された。

田所「和紀さん...諦めてください、選ばれてしまったのですから...」

絢子「冗談じゃないわよ～～自由の権利はあるはずよ～～！警備員っ！！そこを退きなさい！！
訴えるわよ！！」

矢田部「ふっ、聞きしに勝る、勝気な娘じゃな～～（笑）入社試験もダントツの成績だった。
これならピッタリだろう。」

絢子「???...」

矢田部「田所、説明してあげなさい。」

田所「はあ～～、まずは何から説明しましょうか...。和紀さん此方へどうぞ...お掛け下さい。」
と応接セットへ誘導した。

田所「そうですね～～歴史管理室...和紀さんは...どのような職場だと思えますか？」

絢子「...日本史・世界史を調査研究するところと聞いていますけど...」

田所「まあ...間違いではありませんが...それなら、歴史研究室でいい...しかし管理が付く。ここ
は歴史を管理するところなのです。」

絢子「歴史を管理?...歴史を捏造する者を取り締まる場所なんですか？」

田所「それも含まれます。」

絢子「教育現場の歴史教科書を検定するとか...」

田所「教科書に関しては、文部科学省が主体となっています。」

絢子「えっ?ここは文科省の傘下に入っているのですか？」

田所「いや、正確には公安調査庁の特種機関です。」

絢子「公安?...特殊機関?...どういうことですか？」と胸がざわめき始めた...

田所「歴史そのものを監視・管理する場所なのです。」

絢子「どうやって...」

田所「ここには、地下10階まであります。エレベーター表記は地下3階どまりだったでし
ょう？」

絢子は生唾を飲み込みながら、首を縦に振る...なんかえらいことに巻き込まれたと感じ始めた。

田所「4階から下は、大規模な設備で埋め尽くされています。その設備は空間の歪み・振動など
をキャッチするためのものです。文科省からの内密な情報で10年前から施工され、昨年完成し
ました。」

絢子「質問です...内密な情報...というのは？」

田所「タイムマシンが完成したという、未確認の情報からです。現代の技術をもってすれば不
可能なことではなくなってきた...」

絢子「そのタイムマシンがあると、何か影響があるのですか？」

田所「大ありですよ...世界が混乱するだけではなく...歴史を捏造された場合、歴史が変わってしまう...変わるだけではなく...人間が築きあげてきたもの、および人間そのものまで消失する可能性がある。」

そこに矢田部が口を挟んできた。

矢田部「その影響がつい最近、現れた。」

絢子「えっ！！」

矢田部「モンゴルのある都市が消滅したのだ！」

絢子「.....でも...それが私と何が関係あるのですか？」

田所「歴史修正員になってもらいたいのです。」

絢子「と・とんでもない～～できません。」と身震いを禁じ得なかった...

矢田部「歴史監視設備は、先進国で完成している。だがしかし歴史修正員が持つ小型タイムマシンは出来ていないのが実情だ。しかし今日、田所君が作り上げた。」

絢子「もしかして...私は実験台?!...モルモットになれと?...

田所「いや、違う!単独ではないよ。最低2名で構成しなくては。」

絢子「...うう...元気だけが取り柄の私だから?」

田所「違うんだよ!和紀さん!私も歴史修正員の1人だ。」

矢田部「そのとおりだ、田所健一と和紀絢子、両名の者は本日付で歴史修正員を命ずる。」

絢子「ま・待ってください!、どんな事をするのか、皆目見当もつきません。」

矢田部「その辺の事は...田所君と打ち合わせてくれ。私は総理に報告してくる。」

絢子「そ・総理い〜〜?」

矢田部「その通り、国家機密である。隠密裏に解決すること。以上。」と言い置いて、矢田部は研究室を出て行った。

絢子「健一君、恨めしい...なんで私なんか選んだの?」

健一「絢子さんの持つ、行動力と決断力かな...僕にはないものだ...」

絢子「そんな〜〜...いいわ、一人でないのなら。」

健一「ふふっ、そう来なくちゃ(笑)」

絢子「一つ質問だけど...歴史監視装置って...なに?」

健一「説明すると長くなるけど...簡単に.....。時空間...時が流れてきた所に一筋の空間がある。そこに入りし、その空間を移動するのがタイムマシンだ。時空間に入り・移動するとき、人間には感じることでできない空間の歪みや振動が発生する。それをキャッチするのが歴史監視装置だ。まだ日本の時空間には入りしした痕跡がない。また国によるエリアがあって、モンゴル国で記録されたとのことだ。」

絢子「っと言うことは...タイムマシンが使われた?」

健一「そう。」

絢子「確か...10年前にタイムマシンが完成したという情報なのに...なぜ今頃?」

健一「僕も、その頃はまだ中学生だったので、詳細は分からない。理論だけができただけのことも...資料も部分的にネットに流れていた。材料とか制作に時間がかかったのかもしれない...僕でさえここに入社してから、完成に5年かかった。予算もたっぷりあるところでだ。個人では中々材料が手に入らないと思う。だから...10年たった今なんだ。」

絢子「もし...もしもよ、日本で起こったらどうなるの?日本が消えてしまったら...」

健一「...僕らも...消える...」

絢子「消えてしまったら...歴史の修正はできないじゃない...」

健一「大丈夫、国際会議での取り決めがある...」

絢子「国際会議？」

健一「今回は、国単位ではなく都市単位の消失で済んだ。それはモンゴルの創設指導者チンギスカンを狙ったのではないという証明だ。敵...あえて敵と言う...敵もまだ実験段階と思われる。自分に影響が出ては何にもならない...だから他国で事を起こす...」

絢子「そんなことして...何が楽しいのかしら...」

健一「そうだね～～きっと、狂った科学者か宗教上の者と思われる。」

絢子「先の質問の答えは？日本が消失したら？という...」

健一「あつごめん...そうなった場合は他国の歴史修正員に期待するしかない...」

絢子「そっか～～でも歴史修正員用のタイムマシンは、ここ日本でしか完成していないのでしょうか？」

健一「ああ...」

絢子「間に合わないじゃない...」

健一「大丈夫...時間はどうにでもなる...」

田所健一は、別室に和紀絢子を連れて行った。

田所「この箱の中のものを着てみて…」

絢子「な～～に？」

田所「防御スーツだ。」

絢子「防御スーツ？」

田所「そう…時空間移動の時や、万が一敵に攻撃された時、身を守るためのものだ。」

絢子「ちょっと～～、そんなに物騒なの？」

田所「敵は、そんなに甘くない。抵抗されるはず…武器も用意した。」

絢子「嫌！いくら正義のためとはいえ、人殺しなんかしたくない！！」

田所「そ・そんな、熱くならないでくれ～～大丈夫だよ麻醉銃みたいなものだから…」

絢子「そう？…」

絢子は箱の中を見てみた。

絢子「なんか…色気のない色ね～～」

田所「着てみて。」

絢子は仕方が無く着てみることにした。

試着室で姿見を見て絶句する絢子…

絢子「なにこれ～～～ダサ～い！」

田所「えっ…特殊繊維で出来ているんだけど…」とトーンダウン…

絢子「いくら過去と言えども…こんなダサい服着て歩けない～～」

田所はタジタジとしながら…「そっかな～～格好いいと思うけど…」

絢子「健一君の美的感覚…疑うわ！」

田所「…でも…過去に出掛けて、僕らの姿を見せるわけに行かないので…大丈夫だよ～～」

絢子「どうして？」

田所「透明になって行動するから…」

絢子「へえ～～透明人間になれるの？」となんか嬉しそうな表情をした。

絢子「その薬品…不味くないでしょうね～～」

田所「いや…薬品ではない…このスーツ自体に微弱電流を流すと透明になる。」

絢子「…頭や手は？」

田所「ヘルメットがある…手袋も同じ素材で作った…顔はフードを下ろせばいい…」

絢子はヘルメットも被ってみた。

田所「ベルト部分にスイッチがある。」

絢子は姿見を見ながらスイッチを押してみた…徐々に自分の身体が消えていき、顔部分が残った…フードを下ろすと完全に消えた。

田所「どう？（笑）凄いだろ～～この技術は谷田部室長も知らない…二人だけの秘密だ。」

絢子「健一君も着るのでしょうか？どうやってお互い確認し合えばいいの？」

田所「目の部分がスライドする、スライドさせてごらん？」

確かに、スライドできる…スライドさせると防御スーツを身にまとった絢子自身が見えた。

絢子「目の部分…他の人から見えてしまわないの？」

田所「心配ない…今着た時、透明になったと確認するために付けた物だから…後で取り外す。」

絢子「ふ～～ん…面白そうね～～」と何を思ったか、屈み込み試着室からそっと出て、健一の後ろに回り込む。

健一「絢子さん？…」

絢子は、健一の膝の後ろを思いっきり押した。

見事に健一は、もんどり打って尻餅をつく…

健一「?! いったい～～っ…」

絢子は笑いを堪え…

健一「やったな～～～！何処だ？…」とキョロキョロする健一の足をすくう…

健一「絢子さん…もうそのくらいで～～～」

絢子「ふふっ、楽しかった～～どうしたら戻るの？」

健一「イテテテテ…スイッチ…もう一度押してごらん。」

絢子は、元に戻る。

健一「もう…勘弁してよ～～意外と悪戯好きなんだね～絢子さんは…」

絢子「テヘヘ…ごめん…」

健一は、武器なる物も見せてくれた。

一目見て、なんか頼りないほど小さい。絢子の手の中にスッポリと収まってしまう。

絢子「可愛いのね～～（笑）」

健一「絢子さん！間違っても試し打ちは御法度ですよ。威力がありますから…」健一は絢子の悪戯心を牽制した。

絢子「えっ…」

健一「お年寄りや子供ですと…」

絢子「な・なに？」

健一「命の保証はありません…」

絢子は生唾を飲み込む。

健一「大の大人だったら…大丈夫です…そのくらい威力がないと敵の行動を止められません…」

それを聞いて絢子も緊張した。

そうなのである、遊びではない…よくよく考えれば何万…何百万という命が飛んでいるのである。それを捨てるのも救うのも私たちがなのだと気付いた。

絢子の瞳から、一筋の涙が零れた…

絢子「そう…なのよね…今、モンゴルでは数え切れない人が…（泣）」

健一「そう…僕たちが救わなければならない！絢子さん、いいですか？明日早朝、モンゴルに行きます。」

絢子「えっ、ここから出発するのでは？」

健一「現在の…ここから出発すると…モンゴルにたどり着けない…過去にはモンゴルへ渡る術はないに等しい…」

健一「タイムマシンは、場所まで運んでくれない…それが倫理です。敵も何らかの方法でモンゴルに移動したと推測します。」

絢子「判りました…もう一つ聞かせて下さい…タイムマシンは？」

健一「私の着る、防御スーツに組み込まれています。それを操作すると…絢子さんの防御スーツと連動するようになっていきますから…安心して下さい。」

絢子達は、政府専用機でモンゴル入りした。

モンゴルの歴史管理室に直行し、モンゴル管理官と接見した。

歴史監視装置を確認すると、一週間前に空間の歪みと振動を捉えていた。

絢子「凄い装置ですね～～日本では見はぐったけど…」

健一「この装置自体は、日本製です。」

絢子「ふう～～ん…敵はどの時間に行ったのかしら？」

健一「それが判れば苦労しない…」

絢子「え～～っ…じゃ…どうやって？」

健一「消えた都市の歴史を調査しなければ…」

絢子「判ったわ！その都市の創設した人を掴みその年代に飛ぶ。」

健一「流石、頭脳明晰な絢子さんだ。」

そこに、モンゴルの歴史管理室長（ハン・オスト）が入ってきた。

ハン「ヤァ～～ミスタータドコロ…ヨウコソ～」

健一「初めまして…ああ、こちらは和紀絢子です。」

ハン「ヨウコソ、ワキ・アヤコ。」とゴツイ手を伸ばしてきた。

健一「早速ですが…消えた都市は？」

ハン「アァ…ズーンハラーシデス。」

健一「ズーンハラー市…ですか？…」

ハン「ウランバートルカラ、キタへ100キロノトコロニアリマス。」

健一「予備知識として、ズーンハラー市の歴史を聞かせて下さい。」

ハン「OK…コチラへ」

ハン・オスト室長は通訳を介して喋り始めた。

ハン「1950年代後半、ロシアの軍隊が引き上げた跡地にカム・ジャリと言う男が創設したと記録に残っている。遊牧民族の我々は定住の地を求めていた。ズーンハラーには田所の国の捕虜収容所があったのだ。勿論ロシア軍の管理下にあったが…その施設を利用して発展してきた町だ。」

田所「ハッキリした年代は判らないのですか？」

ハン「うーん…1958年から1962年頃までの間かな～～？」

絢子「1958年に行ってみますか？」

田所「難しい…ロシア軍にかち合うと…面倒になる…」

絢子「大丈夫よ～～見えないんだから…」

田所「シッ！」と口の前で人差し指を立てた。

ハン「見えない？どういうこと??」

田所「…」返答に詰まった田所を見て、間髪を入れず絢子は強い口調で言い放つ。

絢子「通訳さん？見えないではなくて＝見つからない＝ですよ！間違わないで下さい。」

通訳は不満そうな顔をしたが、この時代でも女性は優遇されていて、下手に反論しようものならセクハラで訴えられる…男である通訳は不承不承納得した。

田所「ハンさん…ズーン・ハラーのあった場所まで連れて行って頂けますか？」

ハン「OK…帰りは？」

田所「数時間のうちには…待っててもらいます。」

ハン「そうでした…ははは…タイムマシンがあるわけですからね～～世界初の歴史修正員のお二人、我が国のため健闘を祈ります。」と固い握手をしてきた。

===

運転手が「この辺から…ズーン・ハラー市に入ります。何処で車を止めますか？」

田所「なるべく…民家の無かったところに…」

運転手「でしたら、ちょっと戻ります。あと…地図を用意してきました。お使い下さい。」

田所「それは有り難い。」

田所は地図を見て、運転手に確認しながら、現在いる場所にマーキングをする。

そして、絢子と一緒にズーン・ハラー市全体の地理を記憶にとどめようと熟視する。

田所「運転手さん、この作業が上手く行けば、ズーン・ハラー市が復活します。驚く状況が待って

いるかも知れませんが…心得ておいて下さい。」

運転手は固唾をのんで頷いた。

田所「時間はすぐかも知れないし、数時間かかるかも知れません…待っていて下さい。」

大型のバッグを背負い、絢子達は市の中心部に向け歩き出した。

ゴツゴツとした岩場の側に大木があり、ちょっとしたスペースがある。

地図と照らし合わせると…公園になっていた。

絢子「ここ…良いかもしれませんね～～」

田所「よし、ここで飛ぼう…過去に飛んでもこの状態の筈だ…それともいくらか建物ができはじめているかも知れないけど…」

絢子「不思議だわ～～市になるまでの課程が見られないのが残念…」

田所「そうだね～～発展する前に飛ぶんだから…ただそこに人が集まってくる筈…その時、何が起こったわけだ…」

絢子「終わって…戻った時には…公園ですね?…」

田所「ズーン・ハラー市が復活するからね…段々絢子さんも判ってきましたね～～（笑）」

絢子「ふふっ健一さんの影響かな?（笑）」

二人は大型バックを空け、防御スーツに着替えた。

田所「絢子さん…いいですか？行きますよ～～透明スイッチを入れておいて下さい。」

絢子「！…」絢子は無言で構える…

健一のスーツから大型の電卓状のものが引き出される。

お互い初めての経験だ。

決定のスイッチを押した瞬間…景色が揺らいだと思ったらもの凄い風圧が襲ってきて…その風圧に対抗するため飛ぶような体勢に移った。

周囲は灰色である…まるで交互に現れる白黒の世界を高速で移動している感じだ。

絢子は気分が悪くなった…

なんというか…ジェット機に乗っているような負荷だ。

絢子はいつの間にか目を瞑っていた。

お腹の下に地面を感じ、目を開けると同じ場所で腹ばいになっている。

田所健一も、側で同じ体勢だ。

そして、健一は荒い呼吸をしている。

絢子は、ちょっと気分が悪くなっただけで呼吸も乱れていない。

周囲を見回し誰もいないことを確認後、健一に声を掛けた。

絢子「健一さん…大丈夫？」

健一「うう…凄い負荷だった…ふう…」

絢子「つ・着いたようね…大きな木がないわ！…あっこれかな？」と、側にある1m位の苗木を発見する…。

突然側で、声が聞こえた。

モンゴル語だ、通訳がないので何を言っているか判らない。

2人は伏せた状態のままで、ジッと様子を窺っていた。

数人の男女が、スコップ状のものを担いだり、材木を運んだりしている。

馬や牛も数頭いて…草を食んでいた。

建物を建てているようだ。

絢子は、岩場がそのままあるので、健一に合図をし裏側に回り込む。

絢子は囁くような小さな声で「健一さん…このまま様子を見ていたって何も変わらない…敵がいつ来るのか判らないし…」

健一「…でも…どうしようもない、待つしか…それと絢子さん、普通に喋っても大丈夫だよ、インターホンが組み込んである、1km離れても会話ができる。」

絢子「そうなんだ～～でも声を聞かれちゃう…」

健一「大丈夫、防御スーツを着ていれば、声は漏れない。」

絢子「へえ～～良くできているのね～～」と感心する。

健一「色々な状況を考えてのことだ、足音も消せる素材を靴の裏に貼ってある。」

絢子「ふっ完璧！岩場を登って高い位置から見てくる。」と登っていった。

健一『しかし…元気が良いな～～僕は一休み…』

絢子が岩場の上から見渡すと、彼方此方に三角屋根のテントが張られているのを確認できた。まるで西部劇、インディアンの住居のようだ。

作業するモンゴル人の中で、一人だけ馬に乗ったまま指揮している男がいる。

絢子「健一さん、カム・ジャリと思われる人物を発見したわ。馬に乗ってみんなを指揮している！」

健一「そうか～～、カム・ジャリの周囲に注意しよう。」

絢子は思った『敵は、どういう方法を使ってくるのだろう』と。

数分後、健一も岩場の上に登ってきた。

健一「長閑な風景だな～～」

絢子「ねえ…健一さん。未然に防止できないかしら…」

健一「難しいな～～この事件は起こってしまっているんだ。消えてしまった都市…唯一元に戻せるのは…カム・ジャリの死の真相を突きとめないことには…」

絢子「カム・ジャリが死なないようにすれば…ズーン・ハラ市は復活するのね。」

健一「その通りだよ…」

絢子「じゃ…ここで見ていても駄目じゃない…カム・ジャリの側にいなければ…」

健一「…」

絢子「健一さん？」

健一「…カムは馬に乗っている…動きが判らないし…側にいると我々が危険だ…」

絢子「でも…危険を察知しても…ここでは遠いし、いざという時、間に合わないわ。」

その時だった、閃光と爆音が起こったのは…

ズズズ～～ン、ドカ～～ン！！

二人は見た。建築中の建物に、銀色に光る自動車みたいな物が突っ込んでいることを！！

周囲には作業していた人や、カム・ジャリ及び乗っていた馬が無残に転がっていた。

健一は直ぐさま、時間を確認している。

絢子「け・健一さ～～～ん！！やられてしまった～～！」ワナワナと震えが来る…

走り下りようとする絢子の手を健一は必死で掴む。

健一「絢子さん！もう駄目だ！」

絢子「救命処置をすれば…」

健一は首を左右に振る。

カム・ジャリの身体は、無残に変形しているし頭部がない…

絢子は泣き叫ぶ。こんな修羅場を見たのは初めてだ。

その異臭たるもの…二人は吐いた、胃の中のものすべて出てしまったように…

落ち着いてきた頃…銀色の車に変化が生じた。

扉が開いたのである。

一人の男が、ヨロヨロと這い出してきた。

絢子「健一さん！敵が出てきたわ！！やっつけてやる～～」

健一「やめろ～危ないから～～」と止める間もなく、絢子は走った。

男はやっと這い出してきた、周囲の状況にビックリしている様子だ。

思う間もなく、みぞおちに強烈な一撃を食らってもんどり打つ。

男『な・な・なんだ???』

絢子はもう一度蹴りを入れた瞬間、健一に羽交い締めされる。

絢子「止めないで！」

健一「やめろ、絢子さん！敵も怪我をしている。」

絢子も落ち着き、敵を見る。

男の額から血が流れ出ている。

健一「絢子さん、話を聞いてみる。」と言って、透明スイッチをオフにする。

健一「あなたは？誰ですか？」

男は呻きながら苦しそうに「バル・インター……だ……」と英語で喋った。

健一「日本語判りますか？」

バル「少しだけ……難しいの……判らない……」

健一「では、英語で聞きます。」と絢子を見る。

絢子も英会話ができるので頷く。

健一「あなたはどこから来たのですか？」

バルは反対に聞いてきた「あんた達は何者なんだ？」

絢子は言葉を荒げて「尋ねているのは、こちらです！！答えなさい！」

バル「なに！！…この時代の人間じゃないみたいだな～～」

健一「もう一度聞きます。どこから来たのですか？」

バル「ズーン・ハラー市からさ～～」とニタニタして答える。

健一「そんなことは判ってます、出身地を聞いてるのです。」

バル「ふふっそうか～その変な恰好は…未来から来たな。」

絢子は我慢の限度を超えた。

唯一の武器、小型レーザー銃で左足を撃った。

バル「おう！…」と悲鳴を上げる。

絢子「答えなさい！！」と小型レーザー銃を構え直した。

バル「ク～～…判った…イギリスだ。」

健一「目的は？」

バル「目的？そんなのない…」

絢子「ここで、何人亡くなったと思っているのです！許しませんよ！！」

バル「なんて女だ～～っ小娘の癖して！」

絢子が激怒したのを見てとった健一は「絢子さん！駄目です！！撃っては！」と楯になる。

健一「絢子さん…相手の思うつぼです。冷静に。」

バル「男の方が、話がわかるみたいだな～～」

健一「私たちは、お見込みの通り未来から来ました。あなたを追って…」

バル「追ってだと？」

健一「そうです！タイムマシンで過去に飛んだあなたを…」

バル「わしは、ただ単に実験しただけだ。」

健一「実験にしては…ズーン・ハラー市中心部とは解せないですね～～」

バル「わしも、ビックリしているんだ。1958年には何も無い所の筈…ところがどうだ～建物が建ち始めていた…」

健一「歴史を調べなかったのですか？」

バル「調べたとも～～ロシアの捕虜収容所がある筈なんだ。」

健一「ほお～～この収容所は日本兵だけの筈ですが…」

バル「いや…わしの先祖もここに収容されていた。」

絢子が口を出した「第2次世界大戦…1945年に終わったのではないですか？」

健一・バル「??？」

絢子「捕虜収容所が終戦後、どの位残って居たか知りませんが…13年たってますよ。」

バル「先祖からの言い伝えでは…遺骨は1960年頃帰って来たと言われている…」

健一「140年も前…歴史データベースは20世紀の終わりに構築されている…それより前となると紙文化で確実だと思うのだが…入力ミス？」

バル「それと、先祖の記憶違い？」

健一「バルさん…そろそろ、本当の目的を教えてください。」

バル「わしの先祖は、一国の主…城をもっていた。第2次世界大戦で先祖の城主がポーランドへ出兵した折、ロシアの捕虜になった。長い年月帰ってこなかったため城は取られ、無一文となり、苦勞を余儀なくされた…わしは小さな頃から親に城主だったこと、その先祖が捕虜にならなければ今でも、裕福な暮らしが出来たであろう事など伝えられてきた。…2090年にタイムトラベルが可能になる技術を思い付いた…あそこのタイムマシンを完成させるのに10年もかかったよ～もし先祖を救うことが出来るのなら…と…」

健一「危険です。」

バル「なあ～～教えてくれんか…今の未来どうなっている？戻っていないので判らない…」

健一「ズーン・ハラ市は、消滅してしまいました。」

バル「なんと…私がやったことか？」

健一「そうです。あそこ…馬の側に倒れている人物、カム・ジャリというのですが、ズーン・ハラ市を作り上げた人物なのです。その人物を殺してしまった…」

バル「それで…あのズーン・ハラ市が消滅したと…」

健一「そうです。」

バル「じ・事故だ…事故だったんだ…」

絢子「事故にしては…あまりにも多くの犠牲者が…」

バル「えっ！見るからに数人巻き添えになっただけだ…」

絢子「これから142年間、生まれるはずだった人々が一瞬にして、消え去ったのですよ！」

バル「…」

絢子「健一さん…どうしよう～～何も変わらない…」

健一「一つだけ手はある。カム・ジャリの生きていた時に戻ればいい、そしてこの事故から救わなければならない。」

絢子「どうやって…？」

健一「カム・ジャリは、あそこにいた…移動させればいい…」

絢子「モンゴル語が私たち使えないのよ。カム・ジャリが英語理解できればいいのだけど…」

健一「そうか～～どうしよう…」

絢子は名案が浮かんだ。

絢子「この方法しかないわね。」と呟く。

絢子「健一さん、戻りましょう～～バル・インターはどうする？」

健一「このまま置いていっても、差し支えない…成功すれば…」

絢子は、ちょっと引っかけたが…この場所にいつまでも居ると自分が何をしでかすかわからない。

健一が、操作卓を引き出して年数を打っていると…

バル「凄い…それだけでタイムトラベルが出来るのか？」

健一「そうだよ。」

バル「わしのは、あの大掛かりなマシーンだ…」

健一「仕方がないですよ…私たちは政府機関の者です。知識も物も資金も豊富にあるのだから…」

バル「なんと…最後に一つだけ聞かせてくれ…君たちは？」

健一「歴史修正員です、あなたのように歴史を安易に変えてしまったものを修正及び取り締まるのが仕事です。」

バル「なるほど…だからこの娘は手荒いんだ～～」

絢子「それ以上、女性を侮辱すると…」

バル「すまん。イギリスの女性も強いよ…ふふっ」と言い終わらないうちに二人は霞のように消えていった。

戻る時間が少ないため、最初のタイムスリップの時のような負荷はかからなかった。

健一「絢子さん、透明スイッチを入れてあります、すぐ安全なところに移動しましょう。」

絢子は、他のことを考えているようで上の空だった。

健一「絢子さん！着きましたよ。10分前にです。さああの岩場に移動しましょう！」

絢子「はっ、はい！？」

すぐ側では、カム・ジャリや作業人が動き回っている。

絢子「健一さん、私はここに残ります…行って下さい。」

健一「えっ？何をしようというのです？」

絢子「さあ、早く！」と言って透明ボタンを押そうとしていた。

健一「ま・まさか…オトリ？」

絢子は透明スイッチをオフにすると共に、小型レーザー銃でカム・ジャリの足下を狙って撃った。そして、脱兎のごとく走り出す。

カム・ジャリは振り向き絢子を認め、追跡を始めた。

併せて馬上からライフル銃も構えている。

健一「絢子さ〜〜〜ん、危ない！！透明スイッチ〜〜〜」

透明になると、ライフル銃が発射されたのと同様だった。

健一には、絢子が見える。

絢子は、弾かれるように倒れ込んで動かなくなった。

健一「絢子さ〜〜〜ん！！」いくら防御スーツでも、ライフル銃の威力には、防げるかどうか自信がない。

カム・ジャリは、暴漢が突然消えたのでビックリしていた。

健一は、倒れている絢子の側に走り寄り…

兎に角、絢子を移動させないと…、

カム・ジャリがこちらに近寄って来ている。

馬に踏みつぶされる。

健一は、必死だった…絢子の身体を引きずる…

やがて、カム・ジャリは探すのを諦め、元の位置に戻っていく。

健一は、時間を見て焦った…まだ5分ある、何とかしなくては…

絢子も心配だが…自分が止めないとと行動を起こした。

絢子のように走るのが速くない。

健一は、透明のまま小型レーザー銃を使った。

馬の足を狙う。

見事に馬上のカム・ジャリは落馬する。

健一は直ぐさま伏せた。

カム・ジャリがライフル銃を向け、撃ってきたからだ。

カム・ジャリは、建築現場にいる仲間を呼び寄せた。

健一「ヤバイ…こちらがいくら透明でも実体がある…銃を乱射されたら大変だ。」

絢子を引きずりながら岩場の影に急ぐ。

何とか岩場の影に来たが、カム・ジャリ達がすぐ側まで近づいていた。

その時だ、建築中の建物のほうで閃光と爆音が起こった…

ズズズ〜〜〜ン、ドカ〜〜〜ン！！

カム・ジャリ達は、驚いている。

大騒ぎとなり、健一達にかまわず引き返して行った。

健一は、絢子の撃たれた場所を見ている。

背中に黒い跡はあるものの、抜けた形跡がない。

絢子は、気絶しているだけだった。

絢子は「ううう…」とうめき声を上げた。

健一「絢子さん！！、しっかり！大丈夫か？」

絢子は気付いた…途端に痛みで悲鳴を上げる。

絢子「きゃ～～っ痛～～～い！！うううう…」

健一「どういう風に痛いんだ？」

絢子「せ・背中が…呼吸が苦しい…」

健一「ど・どうしよう～～～」

絢子「ちょっと待って…ジッとしていれば…イテテテテ…」

絢子「…な・なんか…あばら骨、1本折れたかヒビが入ったかも…痛い…」

健一は、医学のことはとんと疎い…

絢子「ヒビね！折れたら…動かせないもの…」と少しずつ身体をねじってみる…

絢子「でも…防御スーツ着てて良かったわ～～あの世行きになるところだった…」

健一「なんて無茶なことをするんだ～～」

絢子「あの方法しか…カムを遠ざけられなかったわ～～」

健一「…」

絢子「どうなった？カムは…」

カム・ジャリが何か叫んでいる。

様子を見ていると…バル・インターがタイムマシンから引きずり出されているところだ。

バル「ま・待ってくれ～～これは事故なんだ～～」と哀願しているが…

言葉が通じていないようだ。

作業人達に小突かれている…

カム・ジャリが何か合図をすると、作業人達は四方に散っていく。

怪我をして動けないでいるバル・インターは、カム・ジャリによって射殺されてしまった。

絢子「なんと言うことを～～～」と小型レーザー銃をカムに向けた。

健一「駄目です！！絢子さん！！ズーン・ハラ市が消えてしまいますよ！！」

絢子「ハッ…」

健一「戻りますよ。」

絢子「えっ、マシンをあのままにして行けないわ！」

健一「大丈夫、操作できるものは居ない…」

絢子「そうじゃないの、マシンは記念に残されるでしょう、140年後又誰かが…。」

健一「う～～む…そんなに残っているかな～～」

絢子「せめて…タイム回路だけでも破壊しないと…」

健一「破壊すると言ったって…」

絢子「小型レーザー銃で回路を破壊できないかしら…」

健一「それは可能だ。」

絢子「健一さんなら…タイムトラベルの回路…判るでしょう？」

健一「うん！やってみよう、隙を見て…」

暫くして、絢子は歩けるほど快復した。
痛みは残って居るが、我慢できる痛みだ。
カム・ジャリや作業人達は忙しく働いている。
カム・ジャリだけが、時々絢子達が居た方に視線を向ける。

絢子「健一さん、カム・ジャリという指導者…冷酷ね～～私にも容赦なく撃ってきたし、バルまで…」
健一「そうだね～～顔を見ると苦虫を噛みつぶしたような表情だ。」
絢子「どういう生活をしてきたのか…仲間以外は敵だと思って居るみたい…」
健一「この時代…大戦後間もないんだったよね～～牛や馬が何頭も居る…他の部族に横取りされたりもするんだらうな～～」
絢子「街を作ろうと思ったのも…防衛のため？」
健一「そうに違いない…」

バルの射殺で2人は経過を見ているほど余裕はなくなった。
問題のバル・インターのタイムマシンに近づいていく。
カムが側にいる…
そのマシンは車であった。
10年前の古くさいエコカーである。
ドアを開けると、音がして気付かれる…絢子は周囲に気を配っている…
健一は、フロントガラス越しにタイム回路を発見した。
「T」の形をした基盤…「T」の形が基礎的なタイムトラベルを可能にするモジュールだ。
小型レーザー銃は、大の大人には殺傷能力はないが、機器を破壊するくらいの威力はある。

絢子は「健一さん、バルを遠ざけてあげる」と悪戯っぽい表情をした。
健一「駄目だよ…オトリは…」
絢子「ふふっ」と徐に小石を掴んだ。
絢子は思いきって、岩場の方に石を投げた。
落下した瞬間、カムが反応を示し走り出していく。
絢子「イテテテッ…今のうちよ！！」
健一「また…無理して～（笑）」
健一は直ぐさまドアを開け、回路を破壊した。
健一「これで良いだらう？さあ帰ろう…」
絢子「ええ…」

二人は、出発時間に戻ってきた。

出発点の岩場は、やはり公園であった。

ちゃんと、防御スーツを入れてきたバックも置いてある。

辺りを見回し、大木の影で透明スイッチをオフにすると共に、スーツを脱ぐ。

待たせてある、モンゴル政府専用車のあるところに歩きはじめた。

途中…トレーラーが止まっているのを絢子が見つけた。

絢子「健一さん！あれ…」と指をさす。

健一「んっ??」

絢子「バル・インターがマシーンを運んだ車ではないかしら？」

健一「そう…だとしても…もう終わったのさ。」

絢子「…何とかならないかしら～～見捨ててきてしまったのよ～バルを…」と今にも涙が零れそうと言う潤った目をしている。

健一は絢子の意外な一面を見たような気がした。

本当は優しいのだ…

健一「飛ぶ前に…確保？しかし時間が…判らない…」

絢子「何言っているのよ～～歴史監視装置が記録していたじゃない～～一週間前と…」

健一「そうか～～～ズーン・ハラー市が復活しているから…問題ない。歴史が変わってしまった後には、トレーラーは無かったからね～～市の復活と共にトレーラーも現れた…これが本当の修正になる。絢子さん、気付かせて貰って有り難う～」

絢子「もう一度、街に戻ってマシーンを確認しましょう？」

公園の目の前がズーン・ハラー市立博物館になっていた。

問題のマシーンは、奥まったところにちゃんとあったのである。

タイム回路が壊れた状態で。

健一「この博物館からマシーンを消すのが、本当の姿かも知れない…」

絢子「もう一度…飛びましょう。一週間前に…バルを捕まえるんだけど…それはバルを救うことになるわ…」

健一「そうだね、タイムトラベルさせなければ、バルは死ななくてすむんだね。」

健一「確か…タイムトラベルが起こったのは…10時45分だった…一週間前の10時丁度に設定しよう。トレーラーからマシーンを降ろしたりする時間がそのくらいかかるだろう…」

絢子「バルを確保したら、またタイムマシーンを破壊することを忘れないでね。」

健一「うん…これで最後にしなければ…」

健一「絢子さん…トレーラーのある場所に移動しよう…それから飛ぶ。」

絢子「OK～」

絢子達は、トレーラーの影で防御スーツに着替えた。

目標時間をセットし飛ぶ。

10時丁度、遠くからトレーラーが走ってくる。

絢子達の目の前で、トレーラーは止まる。

下りてきたのは、バル・インターだ。

コンテナの扉を開けようとした時、目の前に健一が小型レーザー銃を構え現れた。

健一はヘルメットのフードをあげ「動くな！」と牽制する。

バルは「おう～」と目を白黒させて両手を挙げる。

絢子は、いざという時の為、透明なままで側に待機している。

それは絢子の独断、バルの目の動きが気になったからだ。

バル「強盗か？か・金ならポケットにもっている…」とポケットに手を入れる。

健一「そのまま、動くな！」

絢子を見た、ズボンのポケットから光るものを抜き出したのを！

絢子は間髪を入れず、レーザー銃で右手甲を撃った。

バル「おう～」と再び声を発し、持っているものを落とした。

落ちたのは拳銃である。

絢子はすかさず、拳銃を蹴り飛ばした。

バルは、ビックリしている。

健一「バル・インター！無駄な抵抗はよせ！」

バル「何故、私の名を知っている…おまえは？」と言いながら、周囲を一瞥している。

健一「国連特殊機関、歴史修正員だ。」

バル「歴史修正員？それがわしになんのようなのだ？」

健一「過去へのタイムトラベルは、させない！」

バル「…何故それを…」

健一「先祖を救いに行くのは、やめた方が良い…」

バルは驚愕な表情をした。

バル「まさか…噂には聞いていた…世界各国でタイムマシンの研究が進められていることを…しかしわしが一番早いはず…開発者だからな！」

健一「そう…一番早かったですよ。実験したのも…」

バル「歴史修正員…とは…わしが歴史を変えたということか？」

健一「その通りです。」

バル「どのようなことが起こったというのだ？」

健一「それは知らない方が良いでしょう。」

バル「……」

健一「あなたを逮捕します。」

それと共に突然、バルの両腕が掴まれたと思ったら、後ろに絞られた。

バル「な・なんだ？」

健一「自動手錠です……非力な女性でも手首に当てれば締まる優れものです。」

絢子はバルの拳銃を拾い上げてきて……透明スイッチをオフにすると共に、ヘルメットのフードを挙げた。

絢子「バルさん……あなたのためです。」

エピローグ

二人は、任務を終え日本の歴史管理室に帰って来た。

谷田部清二室長「良くやってくれた。」と二人を労った。

バル・インターは、国連組織に引き渡し、マシンのタイム回路を破壊してきた。

後にモンゴル政府により、トレーラーもろとも焼却処分になったという。

絢子「ふふっまだ可笑しくって～～」

健一「何が？」

絢子「健一さんったら…真顔で自動手錠なんて言うんですもの～～」

健一「半分は自動だ。」

絢子「確かにね！後ろから、クリップ状の腕輪を填めて紐を絞り込めば良いんだから…か弱い私でも簡単だわ（笑）」

健一「そうだね、絢子さんはか弱い…ふふっ」

絢子「でも…不安が残るわ…今回は旨く行ったけれど、巧妙な手口で歴史を変えられると…」

健一「確かに…今回は事故だったから～～」

絢子「タイムマシン…各国で研究が進められているのでしょうか？」

健一「国連でタイムトラベルのルール作りはされているが…」

絢子「ルールは破るため存在する…と思っている人たちが沢山居る…」

健一「そんな簡単に、タイムマシンは作れないと思っている…」

絢子「それは、健一さんの自負？」

健一「まあ…そうだけど…しかし楽観もしてられない…」

絢子「イヤだわ～忙しくなられても…」と不安を隠せない…

健一は真顔になって言い始めた。

健一「地下10階まで歴史監視設備で埋め尽くされている。そんな大規模の設備…監視するためとはいえ、規模が大きすぎると思わないかい？」

絢子「どういうこと？」

健一「簡単に説明しよう？あれは、ほんの一部に過ぎない…」

絢子は生唾を飲み込む。

健一「監視設備は1割程度…他9割が重要なんだ。日本を含む先進国は防御にも力を注いでいる。」

絢子「モンゴルも先進国？」

健一「いや…数年前の日本製旧型…監視装置のみの設備を提供したから、この事件が起こった。」

絢子「その…重要な役割って？」

健一「タイムトラベラーによる、過去への侵入を防ぐシールドを張るための装置さ。滅多なことでは破られないはず。その暗証キーを知っているのは私だけ…だからこのマシーン付き防御服を万が一、盗難にあっても安心だ。」と不敵な笑みを漏らす。

絢子はそんな健一を見て怖いと思った。

絢子は虚勢を張り「健一君！駄目よ、悪い事を考えたら。」

健一「だ・大丈夫さ…そんなことしない…」と絢子を眩しい目で見ると。

<完>

《あとがき》

時空間の旅人「和紀絢子編」登場人物について

皆様、時空間の旅人「和紀絢子編」を読んで頂いて有り難うございました。

素人が書く小説です…至らない点も沢山あったと思います。

今回、この小説で苦慮したのが登場人物の名前です。主人公「和紀絢子」
準主人公「田所健一」 歴史管理室長「谷田部清一」

ここまでは、意味もなく思い付いた単語をそれなりの漢字を当てはめました。

男二人は、役柄に合う名前と思って付けました。

（田所）は科学者風でしょう？

主人公も、意味がないです…ただ拘ったのは…「絢子」でしょうか…

「綾子」「亜矢子」「彩子」良く出てくる漢字です。

へそ曲がりの私は、あえて「絢子」を使いました。

一番苦慮したのが…外国人の名前です。

まず、モンゴルの歴史管理室長（ハン・オスト）です。

皆さん判りますよね～～（笑）「お役人、印鑑です。よく押しますから…」ですので、「判を押す」…「ハン・オスト」になりました。（笑）

次に、ズーン・ハラ市を統率した当時のリーダー（カム・ジャリ）…いつも、「砂を噛む（カム・ジャリ）」表情をしているリーダーが多いことから、命名（笑）

そして、タイムマシンを完成させたイギリス人。（バル・インター）インターバル＝空間とか音程の意から取ったものです。

以上、内輪の話でした～～～（笑）

